

Q 2 地域の人々の参加の輪を広げるには？

A 1 地域住民が気軽に集まれる場所をつくる

- a13 歴史的な建物を拠点にする ... (特) さっぽろ村コミュニティ工房
 a14 気楽に立ち寄れる喫茶サロンを開設 ... くらくらアートプロジェクト実行委員会
 a15 地元でのお付き合いを大切に拠点を運営 ... 大津の町家を考える会
 a16 駅の待合室をコミュニティスペースに ... 華・花倶楽部

A 2 身近なテーマで参加を仕掛ける

- a17 ワークショップなど双方向型のフォーラムを開催 ... 幸まちづくり研究会
 a18 周辺住民を巻き込んだ公園づくり ... (特) 木と遊ぶ研究所
 a19 毎月の歳時記にあわせて参加型イベントを開催 ... 小田原やんべえ倶楽部
 a20 毎月決まった日に森林ボランティア活動 ... つるがしま里山サポートクラブ

A 3 地域住民が主体となる活動を企画する

- a21 無理をせず、あるがままでてなす農村民泊 ... 安心院町グリーンツーリズム研究会
 a22 地域の名人による“大っきなお茶飲み会”を開催
 ... (特) 朝日町エコミュージアム協会
 a23 地域の一軒一軒がイベントの主催者に ... 村上町屋商人会
 a24 住民自らが地域の魅力を伝える「語り部」に ... 漂探古道

A 4 子どもたちが参加する活動を企画する

- a25 子どもたちの環境活動が地域ネットワークを生む ... 近木っ子会議
 a26 子ども主体の活動を大人が応援 ... (特) みやざき子ども文化センター



A 1 地域住民が気軽に集まれる場所をつくる

a13 歴史的な建物を拠点にする

特定非営利活動法人 さっぽろ村コミュニティ工房（北海道札幌市）

地域づくり活動事例 20 / P71

●地域の歴史を伝える「たまねぎ倉庫」でコミュニティ放送局を開局

地域に根ざしたコミュニティ放送を開局するために、この地域がたまねぎ栽培発祥の地であることにちなんで、空いていた石造りのたまねぎ倉庫を借り上げ、そこを拠点のひとつとした。また、町の古老や、歴史に詳しい専門家を呼んで、まち歩きやフォーラムを行った。まちの歴史を軸にすることで、町内会など、地域の人とのネットワークを広げることができた。

●スペースや設備の提供で拠点に人を集める

この団体では、地域の市民団体の活動を支援するため、事務所内のスペースの提供や、印刷機、コピー機などの貸し出しも行っている。これにより、いつでも市民や団体が気軽に訪問できるようになり、さらに多様なネットワークづくりにつながった。

a14 気楽に立ち寄れる喫茶サロンを開設

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

地域づくり活動事例 4 / P55

●蔵を改修して“たまり場”づくり

会では、まず町内に残る空き蔵を改修して、住民が気軽に集える“たまり場”をつくった。自分たちが楽しめる場であることを大切に、また町外の人にも来てもらえるように、ギャラリーの設置、地場産品の展示販売、名物「しょうゆソフトクリーム」の販売を行っている。

●“たまり場”の名称募集で愛着を持ってもらう

改修にかかる費用(1000万円弱)はメンバーがポケットマネーを出し合うこととし、出費をできるかぎり低く抑えるために自分たちの手で改修したことが、かえって愛着を増すことになった。また、住民に親しみを持ってもらえるようにと、蔵のネーミングを町民から公募し、開設当初は町外の人に蔵の心地よい空間を味わってもらうために、毎月1回プロのミュージシャンを呼んで蔵コンサートを開催した。現在は、子どもたちが学校帰りに立ち寄ってカードゲームをしていたり、婦人会などのちょっとした会合や食事会が開かれたりと、地域に根づいている。

a15 地元でのお付き合いを大切に拠点を運営

大津の町家を考える会（滋賀県大津市）

地域づくり活動事例7 / P58

●活動を地道に続けながら拠点となる空き町家を発見

平成9年の発足以来、会では、シンポジウムや町家見学会の開催、他都市の視察、町家マップの作成、書籍の編集・発行などに取り組んできた。こうした活動を続ける中、平成13年、市内中心部の商店街に空き町家を発見。これまでの活動で築いたネットワークが発見に結びついたのだ。

家主は県内の別の都市で書店を経営。何度も足を運びながら借用の了解を得て、まちづくりの拠点「まちづくり大津百町館」としてオープンさせた。

●町民が利用しやすい「まちづくり大津百町館」の管理

「まちづくり大津百町館」は、休館日の月曜日を除く毎日、会のメンバーがボランティアで常駐し、来館者の案内や館の管理をしている。これは、いつでも気軽に立ち寄って使ってもらえるようにと考えたからだ。館には市民や観光客などの見学者も多いが、個人やグループなどによる展覧会、講演会、文化教室、会合などの会場としてもよく利用されている。町内会にも参加し、地元のお祭りや商店街の行事にも積極的に関わって、周辺の人たちとの日ごろの付き合いを大切にしながら運営にあたっている。

a16 駅の待合室をコミュニティスペースに

華・花倶楽部（北海道浦河町）

地域づくり活動事例26 / P79

●駅に花を飾ったことが縁となり、待合室を多目的に利用

1日の乗降客数が約100人という、もの寂しい地元のJR駅に花を飾ったことで駅員との交流が生まれ、駅の待合室を団体の打ち合わせスペースとして使用させてもらえるようになった。公共施設の貸会議室は終了時刻も早く、仕事をもった女性が多く所属するこの団体にとって好都合のスペースだった。その後、待合室にはミニ図書館やまちの掲示板が設置され、駅が町のコミュニティスペースとなっていった。そのきっかけづくりにこの団体が果たした役割は大きい。

●ひとつの出会いが大きな交流の広がりを生む

花を植える活動により駅員との交流が深まり、クリスマス駅コンサートという企画を生んだ。駅前にクリスマスツリーを設置し利用者に飾り付けに参加してもらったり、会員がコンサート会場のデザインや飾り付けを行った。町の音楽教室の協力を得て駅の事務室、待合室を会場に演奏会を開いた。この日ばかりは小さな駅が人でいっぱいになったという。ひとつのイベントをつくりあげたことがメンバー各人の自信につながり、団体のPRにも役立った。

A2 身近なテーマで参加を仕掛ける

a17 ワークショップなど双方向型のフォーラムを開催

幸まちづくり研究会（神奈川県川崎市）

地域づくり活動事例27 / P80

●JRの操車場跡地利用を地域住民と一緒に検討

会では、JRの操車場跡地の活用提案書を、地域住民と一緒に考えながら作成した。これは「幸ふるさと森づくり」構想と題した、子どもたちが「ふるさと」と思えるような、暮らしていくことが愉しみとなるような土地利用の提案である。作成過程では、ワークショップ・フォーラムを2回開催し、住民の意見がたくさん盛り込まれた。

●一方的な情報発信にならないようにフォーラムの方法を工夫

フォーラム開催以前に、地域の現状と課題、これまでに出了された跡地利用についての地域住民の意見をまとめた「地区カルテ」を作成しており、地域住民と問題や課題の共有はある程度図られていた。そこで、第1回フォーラムではワークショップにより、跡地利用に対する地域住民の思いを集約した。ファシリテーター（進行役）はメンバーが務めたが、事前にそのための勉強会と模擬体験を実施した。続く第2回フォーラムでは、第1回の成果を踏まえてメンバーが作成した提案書案を提示し、パネルディスカッションを中心としながらも、会場とのやり取りを積極的に行いながら、提案書案について議論を行った。その結果を盛り込んで、市に提出した。

a18 周辺住民を巻き込んだ公園づくり

特定非営利活動法人 木と遊ぶ研究所（新潟県上越市）

地域づくり活動事例34 / P87

●借り手を探していた土地で公園づくりを提案し、関係者と交渉

公園づくりの活動は、メンバーが住んでいる住宅街で、長く使われていなかった土地の所有者が、借り手を探しているという情報を得たことがきっかけ。研究所では、すぐに所有者、行政、町内会に話をし、住民参加型の公園整備の企画案をつくった。関係する主体は何かを調べ、すぐに行動に移し、熱心に交渉したことが参加型の公園整備の実現につながった。

●住民から樹木を募集し、子どもたちも参加して整備を行う

整備にあたっては、まず周辺住民に、自分の庭で生長しすぎた樹木の提供を呼びかけた。これにより、植樹の費用は安くすむ上、公園の整備に住民が無理なく自然に参加し、整備後も公園に愛着が持てる。またこの土地は、以前は駐車場として使われており、地面の一部がコンクリートで覆われていた。撤去するにはかなり費用がかかるため、その状態のまま、そこに子どもたちがペイントするイベントを開催した。不用なコンクリートの地面を、整備のアイデアによって、子どもが参加できる活動に利用することができたのだ。

a19 毎月の歳時記にあわせて参加型イベントを開催

小田原やんべえ倶楽部（神奈川県小田原市）

地域づくり活動事例14 / P65

●地域の人たちの知恵を借りて、昔ながらの歳時記を再現

公民館と観光案内所の機能を持つ施設「小田原宿なりわい交流館」を拠点に、地域の生活文化を再発見し、生業（なりわい）と生活のつながりを再生させようと、定例イベント「なりわい歳時記」を毎月開催。地域のお年寄りや生産者・事業者の人たちの知恵を借りて、毎月の歳時記にあわせ、歳時記のしきたりやさまざまな生活に関わる文化を再現する参加型のイベントを実施して、年齢・職業・男女などの壁を越えた交流を生み出した。

●毎回再発見のあるイベントで盛り上げる

身近なテーマを選びながらも、「ああ、そうだったのか」と、常に新しい何かを発見できる仕掛けを工夫した。例えば1月の「雑煮会」では、旧家のレシピから歯ごたえのある鶏肉や小ぶりで味わいぶかい野菜を探し出し、どこか懐かしい雑煮をよみがえらせた。2月の「節分会」では、豆まきだけでなく、魔除けのやっこがし（焼臭がし）、年越しの蕎麦打ちを再現、7月の「草市」では、盆棚の品を商う草市が交流館の近くで開かれていた故事から地場の旬の品の市を立てたりと、他のイベントでは味わえない体験を用意し、参加者を飽きさせない内容とした。

a20 毎月決まった日に森林ボランティア活動

つるがしま里山サポートクラブ（埼玉県鶴ヶ島市）

地域づくり活動事例39 / P92

●第3土曜は地元の里山をきれいにする日

クラブでは、「森林ボランティア」の作業日を、毎月第3土曜日の午前と決めている。毎月同じ日、同じベースの開催は、活動日の定着につながっており、初めて参加する人にとっても「ちょっと行ってみようかな」と思わせる、親しみやすい活動となっている。平成16年度からは第1と第3土曜日の2日を活動日としている。

●森がきれいになって味わう達成感が、次の参加の源

もうひとつ参加しやすい要因は、参加して自分が「行うこと」や「できること」がはっきりしていることである。自然の中で体を動かす作業自体も魅力のひとつであり、半日の作業を終えた後には、森がきれいになっている。自分の力でこれだけきれいにしたという達成感が、次の参加の源になっている。活動を開始して1年と若い団体だが、森林ボランティアを柱として会員数を拡大している。

A 3 地域住民が主体となる活動を企画する

a21 無理をせず、あるがままでもてなす農村民泊

安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県安心院町）

地域づくり活動事例54 / P110

●自然体でできる安心院方式の農村民泊で参加家庭を増やす

安心院方式の農村民泊では、受け入れ農家は、子どもの空き部屋などを宿として提供し、夜の語りも負担にならない程度にする。まかないは、地産の食材を使った朝食だけ。夕食は外食を勧め、移動にはタクシーを使ってもらう。受け入れ農家の労力を軽減するだけでなく、地元に社会的・経済的利益が還元されるように努めている。

●来訪者を迎えることで住民自身が輝き出す

活動推進では、女性や高齢者の知恵が必要とされた。活動に関わる女性たちは、「農家に嫁いで本当に良かった」と素直に思えるようになったという。農村民泊では、来訪者を通して地域への誇りが生まれ、また自分の力が必要とされているという精神的潤いを多くの住民にもたらしめている。それと同時に経済的にも潤っている。

a22 地域の名人による“大っきなお茶飲み会”を開催

特定非営利活動法人 朝日町エコミュージアム協会（山形県朝日町）

地域づくり活動事例31 / P84

●地域の人にとって身近な話題で惹きつける

地域の人たちを主役として活動に参加してもらうため、「かい餅名人」や「ハット汁名人」など、地域の知恵を持つ名人地図を作成した。「料理名人」など広い範囲の名人となると、「私など…」となかなか出てこないものだが、このようなポイントの名人であれば案外探しやすい。

●食べて楽しみながらコミュニケーションを！集いのネーミングも大切

実際の活動は、里山から採取した地元素材を“使って”“食べて”“保存する”をテーマとし、活動発表の場として、「大っきなお茶飲み会」を開催。地元の名人たちによる調理と集いで「食」も楽しんだ。会のネーミングを「大っきなお茶飲み会」としたことで、みんなが気軽に参加しやすい雰囲気になった。

a23 地域の一軒一軒がイベントの主催者に

村上町屋商人会（新潟県村上市）

地域づくり活動事例40 / P93

●各家庭に伝わる人形を見て歩く「人形さま巡り」を開催

会が初めて「人形さま巡り」への参加協力を呼びかけた時、住民の期待は薄かった。代表者は、一軒一軒歩いてまわることから始め、「町を良くしたい」という思いを一人ひとりに直接語ることで、次第に熱意が伝わっていった。1回目の人形さま巡りが終了してみれば3万人を超える人が訪れ、町屋を見た見学者は口々に「趣があって良いですね」と語った。その反応は、参加協力した住民の喜びと自信につながり、次の参加意識を高めることとなった。

●自分たち自身がイベントの主催者として積極的に関わる

ひな人形の展示に協力している住民は、商店経営者がほとんど。家業の合間に人形を見せるというだけでなく、親切な説明つきで訪れた人をもてなすなど、自分たち自身がイベントの主催者として積極的に関わるようになってきた。そして各家で人形の説明をするお年寄りの活動が話題になった。さらに、直接展示に関わらない住民の中にも道案内を買ってでる人たちが現れるなど、活動が地域の人々の中で広がっている。

a24 住民自らが地域の魅力を伝える「語り部」に

漂探古道（和歌山県中辺路町）

地域づくり活動事例13 / P64

●語り部養成講座で地元住民を語り部に

南紀熊野体験博の開催に先立ち県が開催した「語り部養成講座」受講者有志が、地域外からの来訪者と接したことで活気づき、さらにプロ意識をもった語り部を目指して団体を設立。熊野古道の歴史的な意義を住民へ周知するとともに、新たな語り部を養成する目的で、語り部養成講座を開催し、多数の地元住民の参加を実現した。講座では、机上の講義のみならず、実際に熊野古道を散策するなど、地域の魅力を自分のことばで語れるように、各受講者の体験・発見を重要視したカリキュラムを組んだ。

●来訪者との直接の対話が、語り部のやりがいにつながる

来訪者と直に接してその反応を知ることができるのが、語り部の特徴だ。「ありがとう、また来たい」と言われることが、メンバーには何よりのご褒美となる。来訪者が増えるにつれ、その目的も多岐に及ぶ。歴史、スポーツ、自然、癒しなど、多方面から古道を捉えられるようにと、メンバー各人は自分の切り口で地域の魅力を最大限に引き出そうと取り組んでいる。

A4 子どもたちが参加する活動を企画する

a25 子どもたちの環境活動が地域ネットワークを生む

近木っ子会議（大阪府貝塚市）

地域づくり活動事例32 / P85

●行政マンや地域専門家のネットワークを活かして総合学習プログラムを企画

水質ワースト1となった近木川の環境が問題になり、近木川市民フォーラムで、「近木川を遊べる川にしてほしい」という子どもたちからの提言が行われた。この提言を受けるかたちでグループの活動を開始した。グループは、地元市役所職員や学校の教員など、地域で仕事をしているいろいろな人々の交流を促してネットワークを築き、地元の小学校の総合学習を企画・支援した。子どもたち自身が遊びを通じて川の再生を考える企画は、当初の予想を越えて、川の粘土、草木を使用した焼物、染物製作などへも発展していった。これらの実体験をもとに、川の昔のことを調べたいという要望が子どもたちから自然に寄せられ、旧住民へのインタビュー実施のきっかけを得た。

●子どもたちが住民へインタビューし、地域のフォーラムで発表

子どもたちの活動を地域の旧集落の住民にも理解してもらうため、子どもたちによる住民インタビュー調査を行い、それをフォーラムで発表させた。フォーラム実施後、町会が川の清掃に協力してくれたり、農業や水利関係者との連携が見えてきたほか、子どもたち自身にも活動への意欲の高まりが見られるようになった。

a26 子ども主体の活動を大人が応援

特定非営利活動法人 みやざき子ども文化センター（宮崎県宮崎市）

地域づくり活動事例42 / P95

●子どもの視点で一緒にまちをみつめ直してみる

メンバーが小・中学生と一緒に写真を撮りながら中心市街地を歩き、地域の将来を担う子どもたちがまちに抱いている率直な意見をヒアリング。その結果、子どもたち自身が入れる喫茶店が欲しいという要望があがってきた。

●子どもたちが考え、つくるカフェをオープン

そこで、子どもたちの要望をかたちにして、まちなかに子どもたちが運営するカフェを企画した。当初難色を示した近隣商店街へは、メンバーが活動への理解を説いて回った。そして、カフェで販売する菓子の購入や、子どもの接客講習を依頼して快諾されるようになり、現在では商店街側からもカフェ開催の希望が寄せられるほどになっている。